

フィリピンで特別講義を行い、共同研究を推進しました（2017/1/13-14）

テーマ： 災害医療の教育、災害と健康の情報統合、災害医療のシミュレーション

会場： サンラザロ病院、フィリピン保健省、フィリピン大学マニラ校、アンヘレス大学（マニラ、アンヘレス）

2017年1月13日（金）に災害科学国際研究所(IRIDeS)の江川新一教授(災害医学研究部門)は東北大学医学系研究科と部局間学術交流協定のあるフィリピンのサンラザロ病院を訪問し、災害医療と感染症を含むグローバルヘルスに関して『どのようにして災害に強いレジリエントな社会を作るか』と題して特別講義を行いました。サンラザロ病院はフィリピン保健省直轄の病院であり、感染症のみならず、フィリピンの災害医療の基盤を形成する健康危機管理システム(HEMS)の中心的な病院でもあります。講義には感染症研究所を中心とする33名が参加し、アンサーパッドを用いたリアルタイム集計システムによる双方向の講義により災害リスクの考え方と、保健医療が果たすべき役割について深く理解し、高い評価が得られました。

江川新一教授は、続いてフィリピン保健省の知的財産管理部を訪問し、IRIDeSがUNDPとともに構築している災害統計グローバルセンターを紹介し、フィリピン保健省がもつ、各地域の健康統計に関するデータを共有することの可能性を話し合いました。災害統計から、地域の災害リスクを減少させる防災対策の意思決定には、地域の健康に関する背景データが必要なことを説明し、また、平均寿命などに代表される健康指標は災害リスクとも強く相関することを示しました。データの共有に関して前向きに検討していただけることとなりました。

同日午後、江川新一教授は同様に IRIDeS との間に学術交流協定のあるフィリピン大学マニラ校を訪問し、外科・救急医学部門でセミナーを行い、災害医療における医療ニーズを再現することができるシステムダイナミクスモデルを用いた研究プロジェクトを紹介しました。地域の人口、高齢化率、精神疾患罹患率、出生率、非感染性疾患(NCD)による病院受診率などを背景データとして設定し、発災からの時間的な変化をさまざまなシナリオに基づいて患者数、入院必要数などを予測することができます。フィリピンは日本と同様にさまざまな災害に対処しなくてはならず、防災は国民的な課題になっています。災害医療はまさにこれから発展する分野であり、研究に対する意欲も強いものがあります。実際に起きた台風ハイエン災害などのデータを用いてシミュレーションの実証を行う共同研究について進めることができました。

翌日の1月14日（土）には、これもまた同様に IRIDeS との部局間学術交流協定のあるアンヘレス大学公衆衛生学専攻を訪問し、災害医療と感染症に関する2コマの特別講義を行いました。看護師、保健師、教官など80名が聴講しました。災害による健康リスクがそれぞれの災害で大きく異なること、高齢化、都市化、社会の複雑化、グローバリゼーションなどによって健康リスクがダイナミックに変化し、保健医療クラスターには柔軟で、他のクラスターと協力協調する姿勢が求められること、感染症が災害の後に流行しやすいことに対してどのように対処すべきか、災害前に備えるべきことはなにか、バイオハザードに対する標準的な考え方、エボラ出血熱などのような感染症自体が災害になったときの考え方などについて、やはりアンサーパッドを用いた講義によって議論を深め、高い評価が得られました。江川新一教授は、とくに社会の健康状態をどのように測定するかという観点で平均寿命を例にとり、災害リスクとの相関を数値的に比較することで、健康な社会こそが災害にも強い社会であること、災害における健康リスクを減少させるためには、保健医療クラスターはクラスターの中だけの仕事ではなく、他のクラスターに適切な情報を提供し、クラスター間の橋渡しをする役割をもつことを強調しました。

フィリピンでも防災のクラスターは必ずしも保健医療を含んでおらず、相互の情報や知識が共有されないことに対してさまざまな取り組みがなされています。IRIDeSにとっても、わが国にとっても大変有意義なカウンターパートとしてこれからも協力していきます。



サンラザロ病院で講義する江川新一教授



アンサーパッドを用いた双方向性の講義を笑顔で
聴講するサンラザロ病院の研究者・医療従事者



フィリピン大学マニラ校外科・救急医療の
レジデント・教官と



シミュレーションを用いた災害医療の研究に
関してプレゼンテーションする江川新一教授



アンヘレス大学で講義する江川新一教授



熱心に聴講する看護師、保健師などの大学院生と
アンヘレス大学の教官